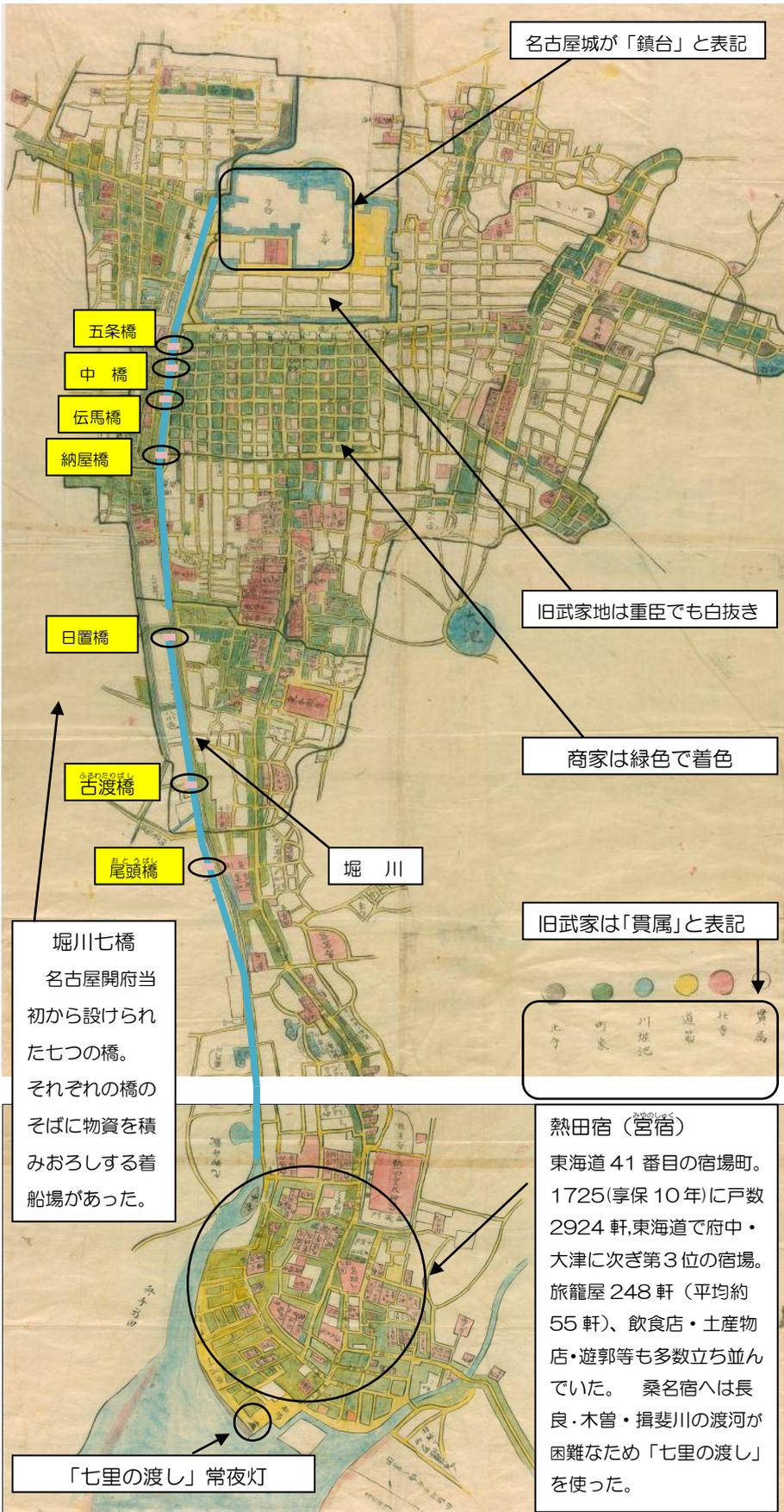


授業で使える当館所蔵地図

No. 16 『(仮) 名古屋地図』
 作成年：不明(1871(明治6)年～1876(明治11)年)年
 サイズ：80×42(cm)
 作者：不明



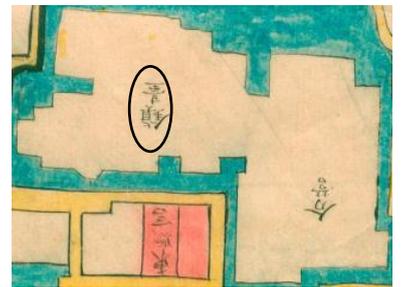
【解説】

江戸時代に形成された名古屋の町並みを明治になって表示した地図。名古屋城の場所に「鎮台」「分営」と表記があることから「名古屋鎮台」の存在した1873(明治6)年～1888(明治21)年に限定される。さらには地図中に「△小区」の記載があることから、大区小区制の施かれた明治4年～明治11年に絞り込まれ、結果明治6年～明治11年の5年間の間に作成された地図ということになる。

小区の区割りが線で示されていることから、おそらくこの大区小区制の行政区画を明示するために作成された地図であろう。

江戸時代の城下絵図は武家地に当主名を記載し、町屋は白抜きにする。しかし、この図は本来武家地だった所はたとえ重臣であろうと白抜きのまま着色せずに「貫属」と表記し、逆に町屋は緑で着色している。つまり、武士と町人の立場が逆転したことを象徴的に示した地図と言える。

尾張徳川家の時代から明治政府の「版籍奉還」(1869(明治2)年)「廃藩置県」(1871(明治4)年)といった流れの中、日本の行政区分や軍事体制・身分制度が大きく変化したことがこの地図から読み取れる。



熱田宿(宮宿)
 東海道41番目の宿場町。1725(享保10年)に戸数2924軒、東海道で府中・大津に次ぎ第3位の宿場。旅籠屋248軒(平均約55軒)、飲食店・土産物店・遊郭等も多数立ち並んでいた。桑名宿へは長良・木曾・揖斐川の渡河が困難なため「七里の渡し」を使った。

堀川七橋
 名古屋開府当初から設けられた七つの橋。それぞれの橋のそばに物資を積みおろしする着船場があった。

「七里の渡し」常夜灯

鎮台(ちんたい)

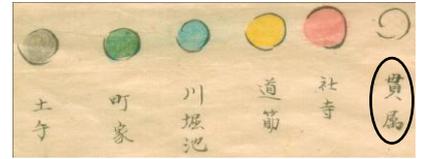
(1) 明治の臨時軍政機関，鎮台府。

(2) 旧日本陸軍編制上の単位。1871(明治4)年4月御親兵が設置され，6月東山(石巻)，西海(小倉)の2鎮台が設けられたが，7月廃藩置県に伴い8月これまでの鎮台を廃止し新たに東京，大阪，鎮西(熊本)，東北(仙台)の4鎮台が設けられ，1873(明治6)年1月には名古屋，広島に新設された。(ブリタニカ国際大百科事典) 貫属(かんぞく)

(1) 戸籍のある土地。

(2) 明治期，地方自治体の管轄に属すること。「東京府一」(大辞林 第三版)

(ここで使われている「貫属」の表記は，「ふつうの名古屋県民になった旧武士の屋敷地」を意味すると見られる)



大区小区(だいくしょうく)

廃藩置県後，政府によって新しく定められた地方行政制度。1871(明治4)年4月に出された戸籍法が，戸籍事務遂行のため新しく区を設定し，戸籍吏として戸長・副戸長をおくことを命じたのが始まり。ついで翌年，戸長・副戸長と旧町村役人(名主・庄屋など)との間における権限の競合に対処するため，旧町村役人の廃止と区制による統一を命ずる布告が出された。規模は各府県で異なりましたが，数カ町村をあわせて小区をつくり，数カ小区をあわせて大区とし，大区に区長，小区に戸長をおくのが一般的であった。区割りは全国的に不評で，後の郡区長村編制法(1878(明治11)年)で廃止された。



(世界大百科事典より 一部改変)

名古屋城

徳川家康が1600(慶長5)年の関ヶ原の合戦に勝利した後，豊臣方の再度の挙兵に備えて四男の松平忠吉を清洲城に配置した。忠吉が1607(慶長12)年急死して七歳の九男義直が尾張藩主になると，家臣団より新城の建造案が進言され，1609(慶長14)年に名古屋城の造営が始まった。二条城・彦根城・伊賀上野城・姫路城などと同様，諸国の大名による無報酬の奉仕で建てる「天下普請」の築城で，大坂を包囲する形で配置され，徳川の権威を示しながら諸大名の経済力もそぎ落とす効果があった。工事を担ったのは加藤清正・細川忠興・池田輝正・福島正則・黒田長政など，旧豊臣方の大名であるのが興味深い。当時清洲は人口6~7万の大都市だったが，名古屋築城を機に屋敷・寺院・商家等を町ぐるみ移転させる「清洲越し」が行なわれた。

(「名古屋時代MAP 江戸尾張編」(光村推古書院))

堀川 1610(慶長15)年徳川家康は，名古屋城築城と清洲越しにおいて，伊勢湾と名古屋城を直結する堀川を福島正則に掘削させた。工期は短く翌1611(慶長16年)の半年程度だった。堀川掘削の理由は，

①「名古屋城ならびに名古屋のまちづくりの資材調達のための運河整備」

②「名古屋城下に生活する人々への物資調達の大動脈としての働き」

③「豊臣方との戦に備えた名古屋城西隣の防衛線，いわば外堀としての役割」と見られる。

碁盤割り商人の領域

碁盤割商人

名古屋城の南部の碁盤割に集住し，尾張徳川家と深いパイプを持ち続けた。清洲越しで呼び寄せられた特権商人が中心だが，清洲越しでない商人にも碁盤割の店は憧れだった。堀川から水揚げした一次産品を二次生産物に加工して城下に流通させた。

①茶屋新四郎(呉服) ②伊藤次郎左衛門(呉服 松阪屋) ③池田又兵衛(菓子 美濃忠(桔梗屋)) ④中北伊助(薬 井筒屋) ⑤林文左衛門(料亭河内屋 河文) ⑥升屋半三郎(茶 升半) ⑦小出庄兵衛(呉服 十一屋) ⑧岡谷惣助(農工具 笹屋) ⑨下村彦右衛門(呉服 大丸屋) 等

堀川商人(四間道界隈) 堀川の東岸に木材，西岸に塩・米などの原料・食料といった一次産品を堀川より水揚げして売りさばく商人が多数住んだ。江戸後期になるとビジネスの根幹を握る立場となって，武士はもとより碁盤割商人も凌駕する実力者を多数輩出した。幕末~明治にかけて，米の先物取引など投機的商売での成功者が多数出てくることも特徴である。

⑩伊藤家(米穀 川伊藤家) ⑪鈴木惣兵衛(材木商 材木屋惣兵衛) ⑫杉屋佐助(米穀) ⑬伊藤萬蔵(米穀) 等



堀川商人の領域

堀川商人(四間道界隈)

堀川の東岸に木材，西岸に塩・米などの原料・食料といった一次産品を堀川より水揚げして売りさばく商人が多数住んだ。江戸後期になるとビジネスの根幹を握る立場となって，武士はもとより碁盤割商人も凌駕する実力者を多数輩出した。幕末~明治にかけて，米の先物取引など投機的商売での成功者が多数出てくることも特徴である。

⑩伊藤家(米穀 川伊藤家) ⑪鈴木惣兵衛(材木商 材木屋惣兵衛) ⑫杉屋佐助(米穀) ⑬伊藤萬蔵(米穀) 等

【利用の例】

○町割りがどんな発想でつくられているか議論しよう。(→ 武家・商家・寺院の配置 軍事 + 経済重視)

○貨幣経済の本格化による町人の台頭について考えてみよう。(→ 町人は繁栄し武士は衰退)

○清洲越し商人と堀川商人の関係について考えてみよう。(→ 特権商人と現場主義の商人の違い)